

**子供の勤労観・職業観を育てる、効果的な職場体験の在り方**  
**計画的・継続的指導による意思決定能力の向上に注目して**

進路指導支援室 長期研修員 加藤多鶴代

## 1 主題設定の理由

「生涯学習社会」への移行が叫ばれ、創造的に生きることのできる人材の育成が求められるようになって久しい。平成8年の中央教育審議会答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」では、「自ら学び、自ら考える力などの[生きる力]という生涯学習の基礎的な資質の育成」がうたわれた。今、子供たちの教育に携わる我々に課せられていることは、この[生きる力]の育成である。そのために「ゆとりの時間」や「総合的な学習の時間」が設けられ、各学校取り組んでいる。しかし、その間の取組において、いくつかの課題も指摘されている(注1)。そこで「生きる力」をどう育成すべきかの指針として登場したのが「キャリア教育」である。平成16年1月に出された「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」の中でも、「『キャリア教育』の視点から教育の在り方を見直すことは『生きる力』を育む教育を推進することに他ならない」と述べている。さらに、その中で「キャリア教育」を、端的には「児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てる教育」と定義している。今後子供たちの勤労観・職業観を育成するという視点で、キャリア教育の推進が強く求められるであろう。既に、多くの中学校では「総合的な学習の時間」に職場体験を導入している(注2)。これは職場体験を通じて子供たちの勤労観・職業観を育てようとするものである。

しかし、勤労観・職業観は職場体験のみで育成されるものではない。勤労観・職業観の形成に関する能力としては「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4能力領域が言われ、教育活動のあらゆる場面で伸長を図ることが期待される。職場体験もその一つであるが、近年、自身がかかわってきた子供の実態から4能力領域のうち意思決定能力に着目し(後に詳述)、職場体験の中でどのように向上していくのかを研究すべく本主題を設定した。

## 2 研究の目的

計画的・継続的な指導に基づいた職場体験が、生徒の意思決定能力の向上に対し有効に働くことを明らかにし、効果的な職場体験の在り方を模索していく。

## 3 研究の方法

- (1) 静岡県内の中学校3校において、職場体験の実施前後で生徒対象にアンケートを行い、担当教諭から聞き取り調査を行うことで、各校の職場体験の取組、特に勤労観・職業観の育成にかかわる指導と生徒の意思決定能力の向上との関連を分析する。
- (2) 先行事例や文献、先進校視察から、中学校のキャリア教育を推進していく職場体験の在り方を模索する。

## 4 研究の内容

### (1) 勤労観・職業観を育てる教育の押さえ

#### ア 勤労観・職業観

平成14年に国立教育政策研究所生徒指導研究センターから出された「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究報告書」によれば、職業観・勤労観とは「職業や勤労についての知識・理解およびそれらが人生で果たす意義や役割についての個々人の認識であり職業・勤労に対する見方・考え方、態度等を内容とする価値観」である。もう少しかみ砕いた表現にするならば、勤労観は「日常生活の中での役割の理解や考え方と役割を果たそうとする態度、および役割を果たす意味やその内容についての考え方(価値観)」であり、職業観は「職業についての理解や考え方と職業に就こうとする態度、および職業をとおして果たす役割の意味やその内容についての考え方(価値観)」(三村隆男著『はじめる小学校キャリア教育』実業之日本社、2004年、13ページ。)ということになる。

キャリア教育先進校である沼津市立原東小学校長工藤榮一氏は職業観・勤労観の育成について「小学校段階で身に付けるべきは勤労観、中学校ではその勤労観を基盤とし膨らめつつ、将来の職業生活を意識した職業観の育成が図られるべき」と述べている。中学校段階では日常生活での自分の役割を意識しつつも、将来の職業生活のイメージも作っていききたいところである。

#### イ 職業観・勤労観の形成に関連する能力

上記の調査研究報告書では、「職業観・勤労観」の形成に関連する能力を「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4能力領域に大別している。その中で、今回注目している「意思決定能力」は、「自らの意思と責任でよりよい選択決定を行うとともに、その過程での課題や葛藤に積極的に取り組み克服する力」をいい、現代の子供にとっては大きな課題となっていると思われる。今までかかわってきた生徒たちを思い起こしてみても、困難にぶつかったとき逃げてしまう傾向が年々強まっているように思う。係や委員会活動に「自分はこれがやりたい」と主張できない生徒や、面倒な役割を進んでやろうとせず、楽な方へ流れてしまう生徒が多い。進路決定の際、明確な意思をもって選択することができず、進学後安易に退学の道を選ぶ生徒も増加しているように思う。そのような生徒たちにとって、よりよい意思決定をするための能力を伸ばす具体的な場面として職場体験をとらえてみた。

### (2) アンケートの実施

#### ア 仮説

意思決定能力の向上の場として職場体験をとらえ、生徒にどのような変化が見られるかについて実証的に迫ってみようと思う。そこで、職場体験を行うことで期待される変化の姿として「次の職場体験を想定し体験事業所を選択するとき、安易かつ消極的理由ではなく堅実かつ積極的理由で選択するようになる」「将来の夢を思い描くとき、体験後には安易かつ消極的理由ではなく堅実かつ積極的な理由を挙げるように

なる」が考えられる。そこで次のような二つの仮説を立て、アンケートの質問項目を設定した。

仮説1「体験事業所の決定理由が、事後アンケートでは安易かつ消極的なものが減り、堅実かつ積極的な内容となっているのではないか」

事前Q1	夏の体験活動で、あなたはどこへ行くつもりですか。
Q3	あなたが今回行く体験場所を選ぶ理由は、次のどれにあたりますか。
-----	
事後Q1	もう一度今回と同じ体験があるとしたらどこへ行きますか。
Q2	その職場を選んだ理由は次のどれにあたりますか。

仮説2「将来就きたい職業について、事後アンケートでは堅実かつ積極的な考えをする生徒が増えてくるのではないか」

事前Q5	あなたは、将来就きたい職業がありますか。
Q5	ア「ある」と答えた人に聞きます。その職業を具体的に書いてください。
Q5	イ「ある」と答えた人に聞きます。 なぜ、その職業に就きたいと思いましたか。
Q5	ウ「ない」「よく分からない」と答えた人に聞きます。 それはなぜですか。
-----	
事後Q5	今あなたには、将来就きたい職業がありますか。
Q5	ア「ある」と答えた人に聞きます。その職業を具体的に書いてください。
Q5	イ「ある」と答えた人に聞きます。 なぜ、その職業に就きたいと思いましたか。

## イ アンケート実施校について

上記のアンケートを、静岡県内の中学校3校（A中学校、B中学校、C中学校）で実施した。3校は本年度7月から8月にかけて、職場体験をそれぞれの形式で実施している。A中学校は職場体験を夏季休業直前の7月20、21日に行うため、事前アンケートを19日の直前指導の時間、事後アンケートを25日の事後指導の時間に実施した。B及びC中学校は職場体験を夏季休業中に行うので、事前アンケートを1学期最終日の7月22日に、事後アンケートを夏季休業明けに実施した。

## ウ 職場体験に関するアンケート回収票数

アンケート	1年			2年			3年			計		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
A中学校	31	31	62	33	25	58	43	30	73	107	86	193
B中学校	29	22	51	24	28	52				53	50	103
C中学校				22	20	42				22	20	42
計	60	53	113	79	73	152	43	30	73	182	156	338

注) 事前・事後アンケートがそろっているもののみを有効とした。

## エ 調査対象校の「職場体験」の取組概要と特色

	A 中学校	B 中学校	C 中学校
実施日	7月20、21日の2日間 (総合的な学習の時間)	夏季休業中の1日実施 (夏休みの課題)	夏季休業中、8月第1週 のうち2日間実施 (夏休みの課題)
対象学年	全校1・2・3学年  10年ほど前から全校の取組 として実施	第1・2学年  今年度、初めて実施	第2学年  昨年度も2年生が実施
昨年度の取組	昨年まで6月中に3日間の 体験学習 (1年) ・公共施設で体験 ・身近な人の職業調べ ・「私の夢」を学活で扱う。 (2年) ・2年からは、自分で事業 所に交渉し、体験を行う。 ・身近な学校調べ ・「働く目的と意義」を学 活で扱う。	・身近な人の職業調べ	総合的な学習のテーマが 「夢」(本年度も継続) ・第1学年で「40歳の自 分」を考える時間を設 け、将来のイメージづ くりを行う。 ・身近な人の職業につい て調べ、レポートを作 成し、発表する。
決定方法	・体験事業所を決めておく よう指示する(既に毎年 の活動との意識が根付い ている)。	・家の人に協力してもら いながら、自分で体験 場所を決定してくるよ う指示する。	・体験事業所は、自分た ちで探そうと投げ掛け る。
事前指導	・「心のノート」(将来の夢 や希望)を使った授業を 行う。 ・マナー(電話のかけ方、 訪問の仕方等)を指導す る。 ・代表生徒を各事業所に派 遣する。生徒は依頼状を 渡し、時間、服装、持ち 物、諸注意の打合せを行 う。 ・同じ事業所で活動する生 徒同士の打合せ時間を設 ける。 ・御礼状の書き方を指導す る。	・各学級で諸注意を伝達 する。 ・交渉の仕方、電話のか け方等を、総合的な学 習の時間に扱う。	・交渉の仕方、電話のか け方等を、総合的な学 習の時間に扱う。
事後指導	・レポート作成と、御礼状 の作成を指示する。(総 合的な学習の時間) ・学級発表会、学年発表会 を実施する。 ・文化祭で学年の代表者に よる発表の機会を設ける。	・ワークシートを用いた レポート作成するよう 指示する。(夏休みの 課題)	・体験した内容をレポー トや作文等、自分の得 意な形式で報告するよ う指示する。(夏休み の課題) ・御礼状の作成(学級活 動)を指示する。

### (3) アンケートの結果と考察

アンケートの結果は、A中学校1・2年とB中学校1・2年のデータの比較を中心に検討していく。そこに必要に応じてA中学校3年、C中学校2年のデータにも触れることとする。なお、資料中の( )内の数字はそれぞれの%を表している。

#### ア 仮説1「体験事業所の決定理由が、事後アンケートでは安易かつ消極的なものが減り、堅実かつ積極的な内容となっているのではないか」

事前アンケートQ1「夏の体験活動で、あなたはどこへ行くつもりですか。」において、具体的な事業所名・施設名を記入してもらい、次にその選択理由Q2「あなたが今回行く体験場所を選ぶ理由は、次のどれにあたりますか。」を尋ね、結果を下資料1に示す。回答は ~ の中から1つ選択とした。

事後アンケートでは、事前アンケートに対応した形でQ1「もう1度今回と同じ活動があるとしたらどこへ行きますか。」を尋ね、その選択理由も同様に選んでもらった。ただし、「家族や先輩に勧められたから」「行かなくてはならないものだったから」「知り合いの家だったから」は省き、新たに「今回とは違う仕事してみたいと思ったから」「一度その仕事をやってみたかったから」を加えた。

選択肢の中で安易かつ消極的な理由と分類したのは、「子供が好きだから」「家族や、先輩に勧められたから」「友達と誘い合わせたから」「楽しそうだったから」「簡単そうだったから」「行かなくてはならないものだったから」「知り合いの家だったから」であり、堅実かつ積極的な理由は、「将来その関係の職業に就きたいと思ったから」「困っている人(病人、老人、障害者など)を助けてあげたいから」「やりがいのありそうな仕事だったから」である。

【資料1】体験事業所を選んだ理由

選択肢	A中学校1,2年		B中学校1,2年		C中学校	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
将来その関係の職業に就きたいと思ったから	12(10.0)	14(11.7)	12(11.7)	10(9.7)	8(19.0)	10(25.0)
子供が好きだから	5(4.2)	6(5.0)	5(4.9)	6(5.8)	7(17.0)	10(25.0)
困っている人を助けてあげたいから	3(2.5)	5(4.2)	1(1.0)	4(3.9)	3(7.1)	4(10.0)
やりがいのありそうな仕事だったから	42(35.0)	16(13.3)	20(19.4)	14(13.6)	14(33.0)	3(7.5)
家族や、先輩に勧められたから	3(2.5)		2(1.9)		0	
友達と誘い合わせたから	15(12.5)	2(1.7)	21(20.4)	7(6.8)	0	0
楽しそうだったから	26(21.7)	18(15.0)	12(11.7)	13(12.6)	7(17.0)	4(10.0)
簡単そうだったから	3(2.5)	1(0.8)	4(3.9)	1(1.0)	0	0
行かなくてはならないものだったから	2(1.7)		3(2.9)		0	
知り合いの家だったから	1(0.8)		12(11.7)		1(2.4)	
その他(父親の仕事、家から近い等)	8(6.7)	4(3.3)	4(3.9)	6(5.8)	2(4.8)	0
今回とは違う仕事してみたいと思ったから		22(18.3)		15(14.6)		3(7.5)
一度その仕事をやってみたかったから		29(24.2)		12(11.7)		6(15.0)
無回答	0	3(2.9)	7(6.8)	15(14.6)	0	2(4.8)

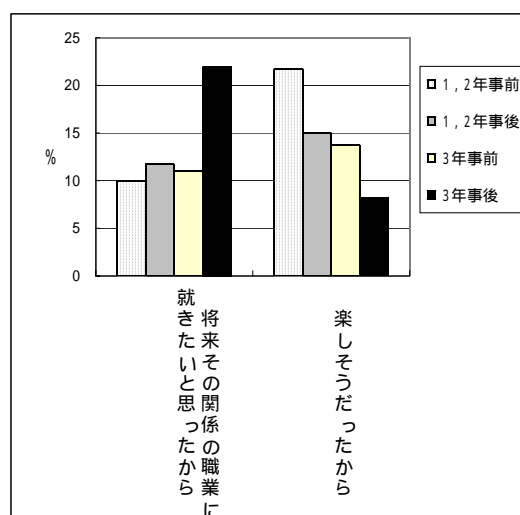
(ア) 「友達と誘い合わせたから」について事前と事後の結果を比較してみると、A中学校が12.5%から1.7%に減少、B中学校も20.4%から6.8%と大きく減少していた。

「簡単そうだったから」も両校とも減っており、安易かつ消極的な選択理由が事後では減少しているということが言えそうである。しかし、その一方で「楽しそうだったから」において、A中学校では21.7%から15.0%に減少したが、B中学校では11.7%から12.6%とわずかながら増加していた。

(イ) 堅実かつ積極的な理由として挙げた「将来その関係の職業に就きたいと思ったから」については、A中学校が10.0%から11.7%と微増だったが、B中学校は12.0%から9.7%とわずかに減少していた。「やりがいのありそうな仕事だったから」については、A中学校で35.0%から13.3%、B中学校で19.4%から13.6%と大きく減少していた。なぜこのような予想と異なる結果が出たのであろうか。資料1を見ると多くの生徒は「今回とは違う仕事もしてみたいと思ったから」「一度その仕事をやってみたかったから」を選択していた。これは1、2年生が「将来」という視点よりも、「今はいろいろな経験をしてみたい」という欲求をもっているためと思われる。しかし、進路選択が具体性を帯びる3年生になると「将来」を意識してくるのではないだろうか。そこで「将来その関係の職業に就きたいと思ったから」と「楽しそうだったから」についてA中学校3年のデータを追加し考察してみる。

(ウ) 資料2のグラフを見ると、「将来その関係の職業に就きたいと思ったから」は3年の事前アンケートまで10%程度で大きな違いはなかった。しかし、3年の事後になると約22%まで上昇し、10項目ある事後の選択理由の中で第1位であった。

【資料2】体験事業所を選んだ理由（A中）



(I) 同じく資料2の「楽しそうだったから」については、1、2年事前で20%を越えていたが、事後では15%程度になり、3年事後では10%を割っていた。

上記のことから「職場体験」を経験することで、体験事業所を選んだ理由において安易かつ消極的な理由が減少する傾向にあると言えそうである。特に、A中学校においてはその傾向が顕著である。

次に注目したのは資料3にある事後のアンケートQ1「もう1度今回と同じ活動があるとしたらどこへ行きますか。」において「分からない」「行かない」及び「無回答」の生徒である。これらの生徒は事業所を決定することができず、職場体験に対する消極性を感じる。

(オ) A中学校は「分からない」及び無回答という生徒が4人(3.3%)、「行かない」という生徒はいなかった。毎年職場体験を行うため、学年ごとに職場体験をやるものだという前提ができている結果であると思われる。

【資料3】次回体験場所を決定できない生徒

		行かない	分からない	無回答
A中	男	0	3(4.7)	0
	女	0	0	1(1.8)
B中	男	3(5.7)	3(5.7)	2(3.8)
	女	1(2.0)	2(4.0)	3(6.0)
C中	男	0	0	0
	女	0	0	0

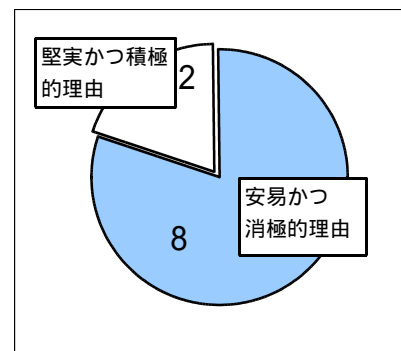
(カ) C中学校においては全員が次回の体験希望事業所を書き出している。もう少し詳しく見ていくと、C中学校2年42人のうち、男子9人女子9人計18人(42.9%)が事前と事後で同じ事業所を書いており、その中の7人は「将来就きたい職業」と一致する事業所を挙げていた。将来の自分のイメージができていることを感じさせる結果である。これはC中学校が昨年度より継続して「夢」をテーマに総合的な学習の時間に取り組んでおり、その成果が表れたものと思われる。

上記(オ)(カ)より、職場体験について事前に学習がなされ、心積もりをして体験に臨んだ生徒は、次回の体験の際にも意思をもって事業所の決定ができると言えよう。

(キ) 一方、B中学校は「行かない」「分からない」「無回答」と答えた生徒が14人(13.6%)と、他の二中学校と比べて高い割合を示していた。しかし、この三つの回答のうち、「行かない」と他の二つは質的な違いがある。「行かない」は職場体験に対する消極性を強く感じる回答であるが、「分からない」「無回答」はそこに心の内面にある「迷い」の表出と考えられる。そこで、B中学校で「分からない」および「無回答」であった生徒10人の、今回における体験事業所を決定した理由を調べてみた。

資料4に示すようにB中学校の10人のうち8人(80.0%)が今回の職場体験において事業所の決定理由に安易かつ消極的な理由を挙げていた。最初は簡単に考えていた職場体験ではあるが、実際体験することで安易に体験場所を決定できないという「迷い」が見られる。つまり、安易な姿勢から混乱・葛藤の状態へと「前進」したと言えるのではないだろうか。

【資料4】次回体験事業所を決定できないB中生徒(10人)の今回の状況



以上のことから、体験事業所の決定理由は職場体験を行う前と比べ、後になると安易かつ消極的なものが減少すると言える。さらに、計画的・継続的な指導がなされることによって堅実かつ積極的な理由で選択できるようになるとも言えそうである。

**イ 仮説2「将来就きたい職業について、事後アンケートでは堅実かつ積極的な考えをする生徒が増えてくるのではないか」**

事前アンケートQ5で「あなたは、将来就きたい職業がありますか。」について選択肢「ある」「ない」「よく分からない」を用意した。次に、「ある」と答えた生徒に具体的な職業名を尋ね(Q5ア)、その職業に就きたい理由を資料6にある13項目から選択してもらった(Q5イ)。その13項目のうち安易かつ消極的理由と分類したのは資料6のゴシック体の5項目( )、堅実かつ積極的理由としたのは残る8項目のうち「その他」を除く7項目である。また、「ない」及び「よく分からない」と答えた生徒には、その理由をQ5ウとして「興味のある仕事

がないから」「どんな仕事があるのか分からないから」「自分がどんな職業に向いているのか分からないから」「まだ決める時期ではないから」「仕事のことなど考えたくないから」「その他」の6項目から選択してもらった。事後アンケートでは、Q5、Q5ア、Q5イを事前アンケートと同様の選択肢で行った。

(ア) 「将来就きたい職業の有無」について事前と事後の割合の変化を見ていく。

資料5によればA中学校は事前、事後とも55人(45.8%)で変化が無く、B中学校は44人(42.7%)から53人(51.5%)に増加している。

【資料5】将来就きたい職業の有無

	事前アンケート			事後アンケート		
	ある	ない	分からない	ある	ない	分からない
A中学校1,2年	55(45.8)	9(7.5)	56(46.7)	55(45.8)	9(7.5)	53(44.2)
B中学校1,2年	44(42.7)	9(8.7)	44(42.7)	53(51.5)	11(10.7)	39(37.9)
C中学校2年	22(52.3)	2(4.8)	18(42.9)	24(57.1)	2(4.8)	16(38.1)

(イ) 「その職業に就きたい理由」を見ていく。

資料6によればA中学校は大きな変化はなかった。B中学校も堅実かつ積極的な理由の増加、安易かつ消極的な理由の減少したが、逆に増加していた。

【資料6】その職業に就きたい理由

	A中学校1,2年		B中学校1,2年	
	事前(55人)	事後(55人)	事前(44人)	事後(53人)
人に喜んでもらえるような仕事をしたい	3(5.5)	4(7.3)	5(11.4)	4(7.5)
困っている人を助けるような仕事をしたい	4(7.3)	5(9.1)	0	3(5.7)
子供を相手にする仕事をしたい	7(12.7)	8(14.5)	5(11.4)	3(5.7)
その仕事をしている人を見てあこがれた	11(20.0)	13(23.6)	14(31.8)	11(20.8)
人に認めてもらえるような仕事をしたい	3(5.5)	3(5.5)	0	2(3.8)
自分の特性を生かしたい	6(10.9)	5(9.1)	6(13.6)	10(18.9)
給料の高い職業に就きたい	1(1.8)	1(1.8)	1(2.3)	3(5.7)
安定した収入を得たい	3(5.5)	1(1.8)	0	1(1.9)
働いて楽しい仕事をしたい	11(20.0)	11(20.0)	7(15.9)	12(22.6)
個人でできる仕事から	0	0	0	0
家業を手伝うことになっている	0	0	0	2(3.8)
家族の生活を支えたい	1(1.8)	1(1.8)	1(2.3)	1(1.9)
その他	4(7.3)	3(5.5)	2(4.5)	1(1.9)

注) ゴシック体の項目は安易かつ消極的理由を表す。

(ア)(イ)からは、堅実かつ積極的な考え方をするようになったという明確な傾向は見いだせないため、事前アンケートと事後アンケートの回答に違いがあった生徒についてそれぞれの選択した理由から検討してみる。

資料7は「将来就きたい職業の有無」において変化のあった生徒について、その理由をQ5イから書き出している。ただし、事後に就きたい職業が「ない」「分からない」と答えた生徒については、事後Q6「今回の活動で何を学びましたか」で自由記述したものの要旨を載せた。

(ウ) A中学校、B中学校において事前には「就きたい職業」があるが、事後に「ない」「分からない」と答えた生徒について見ていく。A中学校1～6の生徒のうち4人は安易かつ消極的理由で職業名を挙げていたが、事後には仕事の大変さに気づき、安易に「就きたい職業」を書き出すことができない「混乱・葛藤」の状態に移行したと考えられる。この傾向はB中学校も同様で、職場体験を経ることで、仕事は楽しさだけでなく、厳しさを伴うことに気付いた結果であろう。

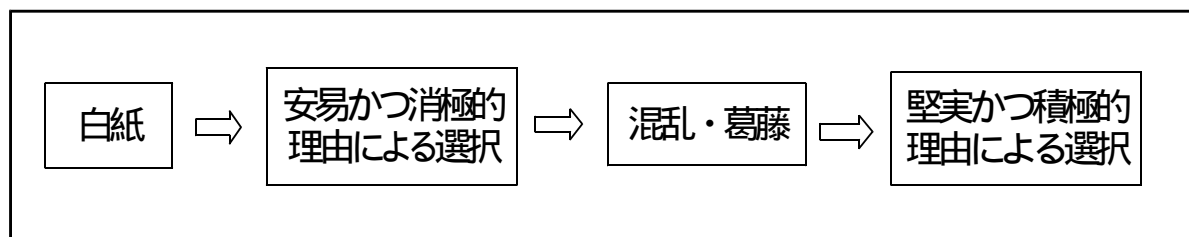


【資料7】将来その職業に就きたい理由（変化のあった生徒）A・B中学校

	事前	事後	事前・その職業に就きたい理由、もしくは就きたい職業がない理由	事後・その職業に就きたい理由（職場体験で学んだこと）
A 中学校	1	保育士	子供を相手にする仕事をしたい	(子供たちの考え方)
	2	研究者	働いていて楽しい仕事をしたい	(お金を稼ぐのは大変だ)
	3	パン屋	働いていて楽しい仕事をしたい	(品物の大切さ、集中力が大事)
	4	エンジニア	働いていて楽しい仕事をしたい	(目上の人への挨拶・マナー)
	5	スポーツ関係	安定した収入を得たい	(大人の大変さ、仕事の大切さ)
	6	公務員	安定した収入を得たい	(図書館の中の仕事)
	7	ケーキ屋	どんな仕事に向いているか分からない	やってる人へのあこがれ
	8	消防士	どんな仕事に向いているか分からない	困っている人を助ける仕事をしたい
	9	アナウンサー	どんな仕事に向いているか分からない	働いていて楽しい仕事をしたい
	10	デザイナー	どんな仕事に向いているか分からない	人に喜んでもらえる仕事をしたい
	11	農業	どんな仕事に向いているか分からない	家業を手伝うことになっている
	12	看護師	その他（興味のある仕事がたくさん）	困っている人を助ける仕事をしたい
B 中学校	1	プロ野球選手	やってる人へのあこがれ	(仕事は大変で驚いてしまった)
	2	プロ野球選手	働いていて楽しい仕事をしたい	(仕事の大変さ)
	3	プロ野球選手	給料の高い職業に就きたい	(ものを売ること)
	4	プログラマー	その他（もっと知りたいことがある）	(働く大変さ、目上の人との接し方)
	5	保育士	子供を相手にする仕事をしたい	(無回答)
	6	美容師	どんな仕事に向いているか分からない	自分の特性を生かしたい
	7	農業	どんな仕事に向いているか分からない	家業を手伝うことになっている
	8	食品関係	どんな仕事に向いているか分からない	働いていて楽しい仕事をしたい
	9	プロ野球選手	まだ決める時期ではない	給料の高い職業に就きたい
	10	どんな仕事でも	興味のある仕事がない	安定した収入を得たい
	11	医師	どんな仕事に向いているか分からない	人に喜んでもらえる仕事をしたい
	12	フライトアテンダント	無回答	安定した収入を得たい
	13	パティシエ	どんな仕事に向いているか分からない	働いていて楽しい仕事をしたい
	14	デザイナー	無回答	人に認めてもらえる仕事をしたい
	15	人と接する職業	どんな仕事に向いているか分からない	働いていて楽しい仕事をしたい
	16	パティシエ	どんな仕事に向いているか分からない	人に喜んでもらえる仕事をしたい
	17	公務員	どんな仕事に向いているか分からない	給料の高い職業に就きたい
	18	プロ野球選手	まだ決める時期ではない	自分の特性を生かしたい
	19	社会人野球選手	無回答	働いていて楽しい仕事をしたい

(I) 次に、事前では「就きたい職業」において「ない」「分からない」と答えていたが、事後就きたい職業名を挙げてきた生徒について見ていく。このとき、「ない」「分からない」理由として挙げられている3項目のうち「興味のある仕事がない」「まだ決める時期ではない」は、将来の職業に対する意識という点で見たとき、ほとんど白紙の状態と言えよう（B9、10、18）。一方、「どんな仕事に向いているか分からない」は前出の2項目と異なり、「混乱・葛藤」の状態であると思われる。これらを仮説1の(キ)と併せてみると、生徒の将来の職業に対する意思決定能力は、次のように向上していくと考えられる。

【資料8】意思決定能力の向上モデル



生徒の将来の職業に対する意思決定能力は前頁資料 8 のモデルのように、「興味のある仕事はない」「まだ決める時期ではない」という白紙の状態から安易かつ消極的理由による選択、そして、「どんな仕事に向いているか分からない」という混乱・葛藤の状態を経て、堅実かつ積極的な選択ができるようになっていえるだろうか。そう考えたときに、A 中学校 7～12 の生徒は既に混乱・葛藤の中であって、事後には 6 人中 4 人が堅実かつ積極的な選択ができるようになっている。

B 中学校 6～19 の生徒について見ていくと、事前に「どんな仕事に向いているか分からない」と答えた生徒 8 人のうち 4 人は事後に堅実かつ積極的理由で職業名を挙げていた。また、「興味のある仕事がない」「まだ決める時期ではない」と答えていた 3 人も白紙の状態から安易かつ消極的理由による選択ができるまでには「前進」したと言える。

前頁(ウ)(イ)より、職場体験を機に、自分の将来についてわずかながらも前向きに考えられるようになる生徒の姿が見えてきた。その際、事前には将来の職業を書き出せたにもかかわらず、事後書けなくなった生徒及び、実現が非常に困難と予想される職業を事後に書いてくる生徒などは一見後退しているように感じられるが、意思決定能力向上の一つの過程であり、今後の一層の進歩が期待できると考えられる。そして、計画的・継続的な指導が生徒たちの職業に対する意思決定能力の向上を促し、堅実かつ積極的に考える生徒を増加させると考えられる。

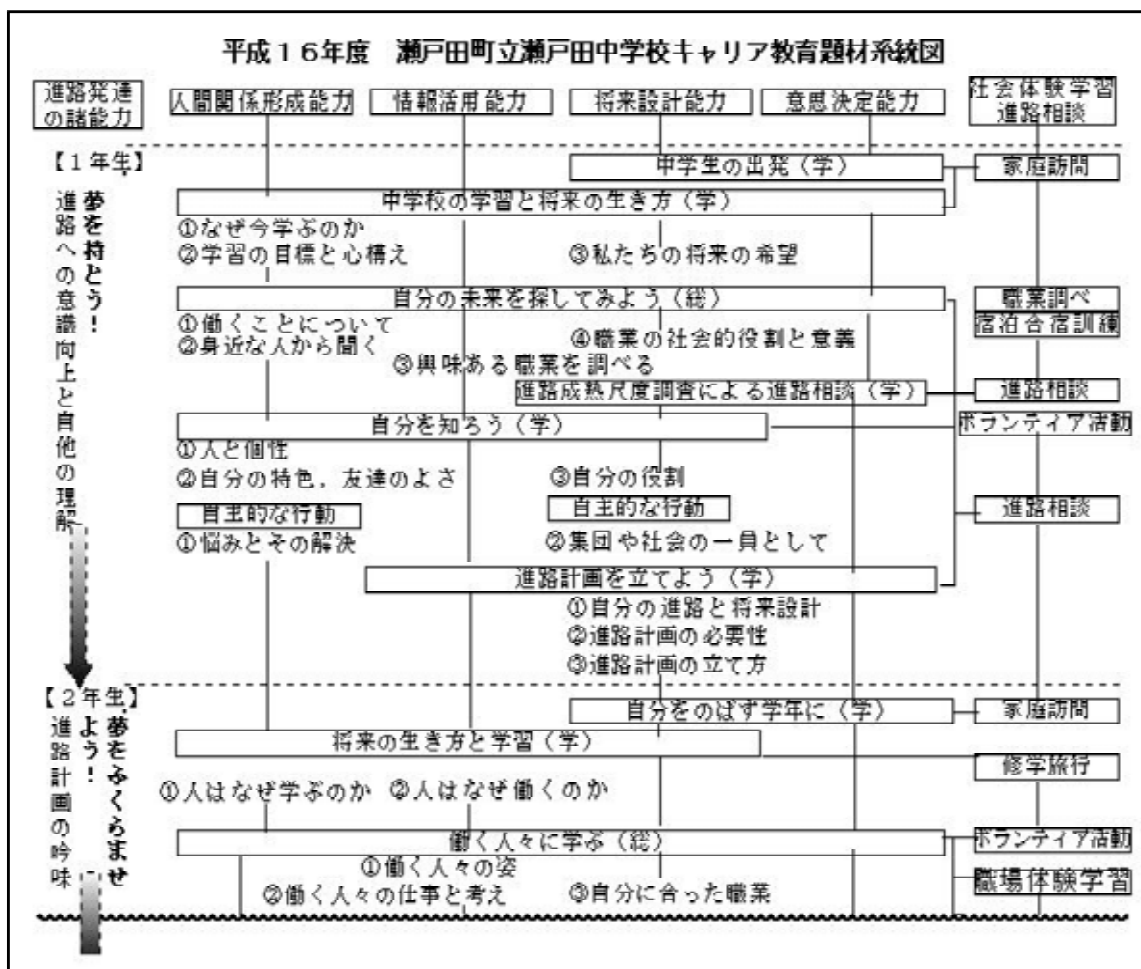
以上のことから、職場体験を経ることによって意思決定能力が高まるという仮説 1 及び仮説 2 は妥当であると言える。また、その際に、3 年間の計画に基づいて実施された計画的・継続的な職場体験であった場合、より顕著な傾向が見られることも分かってきた。

#### (4) キャリア教育先進校での取組

3 年間（またはそれ以上）の計画的・継続的指導の実践事例としてキャリア教育推進地域である広島県の尾三地域の活動を紹介する。瀬戸内の生口島内にある 3 小学校、2 中学校、1 高等学校は文部科学省から平成 16・17・18 年度「キャリア教育推進地域指定事業」の実践協力校として委嘱された。6 校は連携して組織的・系統的な教育活動の開発に取り組んでおり、資料 9 のように各校 3 年、もしくは 6 年のキャリア教育題材系統図を作成している。

6 校は、共通の様式で独自の計画を作成しているが、ここでは瀬戸田町立瀬戸田中学校のものを例に挙げた。瀬戸田中学校では第 1 学年で職業調べ等働くことの意義について学び、第 2 学年で体験学習を実施、第 3 学年で将来を意識した上級学校調べを行っている。職場体験は第 2 学年の 10 月に計画されている。

【資料9】尾三地域共通キャリア教育題材系統図（一部）

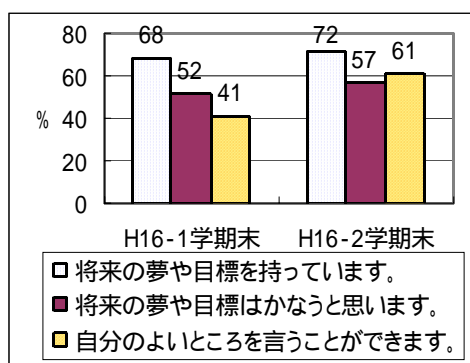


出典) 瀬戸田町立(現尾道市立)瀬戸田中学校ホームページより

また、尾三地域では、各校の教育活動の評価として(財)進路指導協会から出ている「中学生における『進路成熟尺度』による診断と指導」を参考に作成したアンケートを生徒対象に行っている。31項目からなるアンケートで、これを「将来の夢や目標を持っています」(進路成熟尺度によれば「自己実現的態度」)「将来の夢や目標はかなうと思います」(同「進路計画」)「自分のよいところを言うことができます」(同「進路決定」)の3つの視点で分析をしている。これら3つの視点は4能力領域と個別に対応するものではないが、全体的にとらえてみると、資料10から勤労観・職業観にかかわる意識が職場体験の前と比べ、体験後に向上しているのが見て取れる。

このように、3年間を見通した教育活動の中に位置付けられた職場体験は、子供の勤労観・職業観の育成において効果的な活動と考えられる。

【資料10】2年職場体験学習後の生徒の意識の変化



出典) 瀬戸田中学校視察資料より

## 5 研究のまとめ

### (1) 研究の成果

今回調査を行った県内3中学校の職場体験において、体験を経ることによる意思決定能力の向上の可能性が見えてきた。また、その体験が計画的な指導の中で継続的に実施されたならば、その向上の度合いがより顕著であるという傾向も見えてきた。「職場体験」のマニュアルが作成してあったり、総合的な学習の時間と関連付けて将来のイメージづくりをしたりすると、職場体験はより効果的な活動となるように思われる。

キャリア教育、すなわち子供の勤労観・職業観を育てる教育を考えると、職場体験は核となり得る活動である。しかし、キャリア教育を職場体験活動に限定すべきものではない。職場体験は計画的・継続的な教育プログラムに位置付けることでより大きな効果を上げることができる。と同時に、資料8で述べたように、生徒の意思決定能力の向上には段階があることを考慮して、計画的・継続的な指導を構成する必要があるだろう。

### (2) 研究の課題

上記の成果を踏まえ、今後次のような課題に取り組むべきであろう。

第一に、継続的な職場体験が意思決定能力の向上に対して効果を増すことにより明確な実態把握のために、職場体験を複数年実施している学校の追跡調査が必要と思われる。

第二に、職場体験をより包括的にとらえるため、他の能力（人間関係形成能力、情報活用能力、将来設計能力）の向上についても実態調査を行う必要があると思われる。

第三に、子供の勤労観・職業観の育成に既に取り組んでいる学校の活動を参考に、地域の特色、子供の実態などを踏まえて3年間の見通しをもった各校独自のキャリア教育計画（プログラム）の作成が求められるようになってくるであろう。

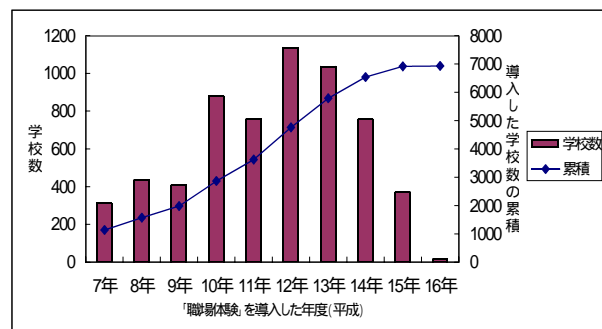
以上の課題に取り組むことで、職場体験を単発の行事に終わらせず、効果的な教育活動として位置付けることが可能となるのではないだろうか。

注

1) 平成15年中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」第2章3「総合的な学習の時間」の一層の充実(1)現状と課題

2) 平成16年国立教育政策研究所が「職場体験・インターンシップ状況把握調査」を実施し、平成17年に報告されている。その中で、中学校における職場体験の導入について、右のような結果が出ている。

中学校における職場体験の導入の状況



注)「職場体験・インターンシップ状況把握調査」(平成16年10月実施、国立教育政策研究所)を基に筆者が作成

## 参考文献

- ・堀川博基著『職場体験プラス の生き方学習』, 実業之日本社, 2004年 .
- ・市川伸一著『学力から人間力へ』, 教育出版, 2003年 .
- ・三村隆男著『キャリア教育入門 その理論と実践のために』, 実業之日本社, 2004年 .
- ・三村隆男著『はじめる小学校キャリア教育』, 実業之日本社, 2004年 .
- ・三村隆男、沼津市立原東小学校共編『キャリア教育が小学校を変える』, 実業之日本社, 2005年 .
- ・宮下和己「キャリア教育の推進について」『進路指導』4月号, 日本進路指導協会, 2004年, 28-36ページ .
- ・仙崎武編『教職研修総合特集 142 キャリア教育読本』, 教育開発研究所, 2000年 .
- ・仙崎武、進路力を育てるネットワーク著『中学生の進路力を育てる総合的な生き方の学習プラン』, 実業之日本社, 2004年 .
- ・渡邊三枝子「キャリア教育の意義とその背景」『進路指導』4月号, 日本進路指導協会, 2004年, 37-45ページ .
- ・柳井修著『キャリア発達論 青年期のキャリア形成と進路指導の展開』, ナカニシヤ出版, 2001年 .
- ・中央教育審議会『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(答申)』, 1994年 .
- ・中央教育審議会『初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について(答申)』, 2003年 .
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について(調査研究報告書)』, 2002年 .
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター『「職場体験・インターンシップ状況把握調査」調査概要(速報版)』, 2005年 .
- ・文部科学省『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』, 2004年 .
- ・文部科学省『キャリア教育の推進に向けて～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』, 2004年 .
- ・文部科学省『中学校職場体験ガイド』, 2005年 .
- ・藤森洋一「中学校におけるキャリア教育カリキュラムの開発 地域との協働を軸とした生きる力の育成について」『神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告』, 2004年 .
- ・神崎勇之広島県立教育センター長期研修員「啓発的な体験活動を取り入れた中学校進路指導年間計画の作成 キャリア発達にかかわる能力の育成に視点を据えて」, 2005年 .
- ・山本秀樹「中学校のキャリア教育を充実させる社会体験活動の在り方」『平成16年度長期研修員研究報告書』, 静岡県総合教育センター, 2005年 .
- ・『視察研修資料』, 尾道市立瀬戸田中学校, 尾道市立生口中学校, 2004-2005年 . 沼津市立原東小学校, 2005年 .



	A中学校1,2年		B中学校1,2年	
	事前(55人)	事後(55人)	事前(44人)	事後(53人)
人に喜んでもらえるような仕事をしたい	3( 5.5)	4( 7.3)	5(11.4)	4( 7.5)
困っている人を助けるような仕事をしたい	4( 7.3)	5( 9.1)	0	3( 5.7)
子どもを相手にする仕事をしたい	7(12.7)	8(14.5)	5(11.4)	3( 5.7)
その仕事をしている人を見てあこがれた	11(20.0)	13(23.6)	14(31.8)	11(20.8)
人に認めてもらえるような仕事をしたい	3( 5.5)	3( 5.5)	0	2( 3.8)
自分の特性を生かしたい	6(10.9)	5( 9.1)	6(13.6)	10(18.9)
給料の高い職業に就きたい	1( 1.8)	1( 1.8)	1( 2.3)	3( 5.7)
安定した収入を得たい	3( 5.5)	1( 1.8)	0	1( 1.9)
働いていて楽しい仕事をしたい	11(20.0)	11(20.0)	7(15.9)	12(22.6)
個人でできる仕事だから	0	0	0	0
家業を手伝うことになっている	0	0	0	2( 3.8)
家族の生活を支えたい	1( 1.8)	1( 1.8)	1( 2.3)	1( 1.9)
その他	4( 7.3)	3( 5.5)	2( 4.5)	1( 1.9)

	A中学校1,2年		B中学校1,2年	
	事前(55人)	事後(55人)	事前(44人)	事後(53人)
人に喜んでもらえるような仕事をしたい	3( 5.5)	4( 7.3)	5(11.4)	4( 7.5)
困っている人を助けるような仕事をしたい	4( 7.3)	5( 9.1)	0	3( 5.7)
子供を相手にする仕事をしたい	7(12.7)	8(14.5)	5(11.4)	3( 5.7)
その仕事をしている人を見てあこがれた	11(20.0)	13(23.6)	14(31.8)	11(20.8)
人に認めてもらえるような仕事をしたい	3( 5.5)	3( 5.5)	0	2( 3.8)
自分の特性を生かしたい	6(10.9)	5( 9.1)	6(13.6)	10(18.9)
給料の高い職業に就きたい	1( 1.8)	1( 1.8)	1( 2.3)	3( 5.7)
安定した収入を得たい	3( 5.5)	1( 1.8)	0	1( 1.9)
働いていて楽しい仕事をしたい	11(20.0)	11(20.0)	7(15.9)	12(22.6)
個人でできる仕事だから	0	0	0	0
家業を手伝うことになっている	0	0	0	2( 3.8)
家族の生活を支えたい	1( 1.8)	1( 1.8)	1( 2.3)	1( 1.9)
その他	4( 7.3)	3( 5.5)	2( 4.5)	1( 1.9)